

マタンサ デ ポルコ

人形(豚殺し)(標本番号H150749、高さ/15.0cm 幅/22.0cm 奥行/16.0cm)

野林 厚志 (のばやし あつし)

本館文化資源研究センター

表紙の資料はポルトガルのポルト地方で作られている土製の人形である。ポルトガル語で「マタンサ デ ポルコ」と題されたこの人形は、ブタをほふる様子をあらわしたものであり、農村風景のひとつコマを物語る資料となっている。ブタは、頭の中から尻尾の先まで余すところなく人間が利用できる動物である。とりわけ、秋のとは口にブタを殺して、塩漬けの肉、腸詰、燻製肉、ハムといったいろいろな保存食品を作り、長い冬に備える光景はヨーロッパの風物詩と言ってもよいだろう。なお民博のビデオテーク番組では、ドイツのソーセージ作りの様子を楽しむことができる(番組番号1218「ドイツのソーセージづくり」)。

ポルトガルに限らず、ヨーロッパにおいてブタは大切な家畜のひとつとなってきた。豊



かな森林に恵まれたかつてのヨーロッパは、ブタの放牧に非常に適した地域であった。中

世ヨーロッパの絵画には、しばしば森林のなかでどんぐりを餌としながら、放し飼いにされているブタの姿を見ることがができる。森林は、どんぐりや木の実だけでなく、昆虫やミズといった小動物、クズやタロイモといった根茎類等、ブタが好物とする食糧を与えてくれる絶好の住処^{すみか}であった。農地や工業地、住宅地の開発によって森林は減少していき、やがて森林のブタ放牧はおこなわれなくなっていた。最近では、コルク樫の林で育てられるスペインのイベリコ豚が人気を呼んでいるが、これらはかつてのブタ放牧が再び評価されての現象とも言えるだろう。

ブタといえは畜舎飼育をすぐに思い浮かべてしまうが、ブタの祖先種は森林を自由に闊歩するイノシシである。緑深い森林はブタにとっても暮らしやすい環境なのである。